

## 「五千人の給食」と「四千人の給食」の奇跡に見る 「御国の福音」のヴィジョン

### ベレーシート

- 共観福音書において、イエシュアの公生涯の最初の宣教メッセージは以下の通りです。

「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」(マタイ 4:17)

「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ 1:15)

この二つを合わせるなら、「天の御国」と「神の国」は同義であること。そして、「悔い改める」こと、すなわち、神に立ち返ることによって、神の支配(統治)による良きおとずれ(福音)を信じるようにというものでした。イエシュアの言動のすべては、「天の御国」、あるいは「神の国」に関するものでした。

### (1) 「御国の福音」への気づき

- 神の導きは私たちの思いや考えを越えて働いています。特に、重要な事柄への導きは時にはいつから始まったのか、明確ではないこともしばしばです。2014年の2月に、私が所属する日本神の教会連盟の牧師会が静岡でもたれました。そのときの「霊性の回復セミナー」を準備する中で、私は使徒の働き 20章から、「**神の恵みの福音**」と「**御国の福音**」があることに気づかされたので、そのことを扱いました。「神の恵みの福音」は「和解の福音」とも「十字架の福音」「赦しの福音」とも呼ばれますが、「御国の福音」については私は盲目でした。前者と後者の区別がついておらず、ごっちゃになっていたのです。

- 「置換神学」と「個人的救いの強調」の弊害を感じながら、ヘブル的視点から聖書を横に読み続けてきました。その間、不思議な出会いを数多く経験しながら導かれてきましたが、混乱の原因の一つとして、伝道至上主義の持つ聖書理解もひとつの理解の型紙となっていることに気づき始めました。初代教会の福音の理解、そして使徒パウロの福音には二面性があること、つまり、「御国の福音」の中に「神の恵みの福音」が位置づけられていることに気づき始めました。福音を伝える上で重要なのは、個人の体験、個人の信仰のあかしです。これはイエシュアの十字架の恵みの福音のもつ性格です。罪の赦しの確信、神の子どもとされた確信、自分中心ではなく神中心の生き方をもち神の愛と恵みの経験を目に見える形に、すなわち、生き方であかししていく必要に迫られるのです。しかし、「御国の福音」の特徴は体験をあかしできないことです。これは神の約束を信じることであり、しかも独りよがりではなく、聖書によって論証することが求められます。使徒パウロは、エペソの教会を建て上げて行く上で、「神の恵みの福音」をあかしすると同時に、「御国の福音」を語り続けました。しかも、「余すところなく」とあります。

【新改訳改訂第3版】使徒の働き 20章 24~27節

24 けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。

25 皆さん。御国を宣べ伝えてあなたがたの中を巡回した私の顔を、あなたがたはもう二度と見ることがないことを、いま

私は知っています。(※「御国」を「御国の福音」と訳すこともできます。)

26 ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。

27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。



●パウロほどに神の恵みの豊かさをあかしした人はいません。そして「この恵みが与えられたのは、キリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝える」ためであると、その使命を自覚していました。自分に対する救いも、罪の赦しも、いやしも働きも、すべて神の恵みとして経験したことを彼はあかししています。と同時に彼は、長い間隠されてきた「御国の福音」の奥義を啓示された人でもあります。

●キリスト教会は主にある一人ひとりに対して、自分が経験した神の恵みの福音をあかしする(testifying)ことを心掛けさせてきたと思います。単なる知識ではなく、生きたあかし人となることを勧めてきました。それは正しいことであり、間違っはおりません。しかし見落としてきたものがあるのです。それが「御国の福音」を宣べ伝え(preaching)、教え伝える(teaching)ということです。

## (2) 「御国の福音」は神のご計画全体におよぶ

●しかし、「御国の福音」は、27 節に示されているように、「神のご計画全体」におよぶ鳥瞰的な内容を含んでいます。しかもパウロは、それを「余すところなく知らせておいた」と述べています。「余すところなく」と訳されたギリシア語は「退く、ひるむ、避ける」という意味の「ヒュポステッロー」(ὑποστέλλω)と、それを否定することばで表現しています。難しいという理由で、語ることを「ひるんだりはしない」と言っているのです。この視点が聖書の正しい理解を支えて行きます。見知らぬ地でも地図をもって歩くことになるので、自分の思いや判断で迷路に入ったりする失敗が少なくなるのです。

●パウロのいう「御国の福音」は、イエシュアがイスラエルの民に向けて語った福音です。この福音は、旧約のアブラハム契約、モーセ契約、ダビデ契約など、また預言者たちが語ったように、「終わりの日」にメシアによって実現する神の統治(支配)の到来によって実現し、完成する福音です。しかもそれはこの地上において目に見える形で実現します。「御国の福音」は、イエシュアの再臨によって実現する「メシア王国」(千年王国)であると同時に、次のステージをも含んでいます。つまり、黙示録 21~22 章に描かれているような永遠の御国(新し

いエルサレム)が備えられています。前置きがながくなりましたが、このような「御国の福音」の視点から、今回「五千人の給食」と「四千人の給食」の奇跡を取り上げたいと思います。あるいは、タイトルとして挙げたように、「五千人の給食」と「四千人の給食」の奇跡に隠された「御国の福音」のヴィジョンを提示してみたいと思います。

●なぜ、似たようなこの二つの奇跡が記されているのか。なぜ、「五千人の給食」が先で、「四千人の給食」が後に置かれているのか。こうした疑問を「御国の福音」の視点から考察してみたいと思います。

## 1. 五千人の給食が示唆していること

●「五千人の給食」の奇跡にある「五つのパンと二匹の魚」は有名です。貧しいながらも、それを主に差し出すことで奇跡的な神のみわざがなされるという意味で解釈されることが多い箇所です。こうしたメッセージは、教会の会堂建設や何かのプロジェクトを進める場合の励ましのメッセージとしては都合の良い解釈です。各自の賜物を活かし合うことで予想をはるかに超えた神のみわざを見ることがしばしばあるからです。確かにそうしたメッセージは聖書の中にあることも事実ですから、間違っていないと思います。しかし、この二つの奇跡を「御国の福音」という視点から見れば、また別の解釈が可能なのです。

●神田満師は現在、空知太栄光キリスト教会の礼拝において、ヨハネの福音書を講解説教してくれています。回を追うごとに新しい数々の発見を提示してくれていますが、一年程前に、「五千人の給食」を扱った時に私は驚かされました。それは今までにない光が差し込んだからです。それはイエシュアが言ったことばです。

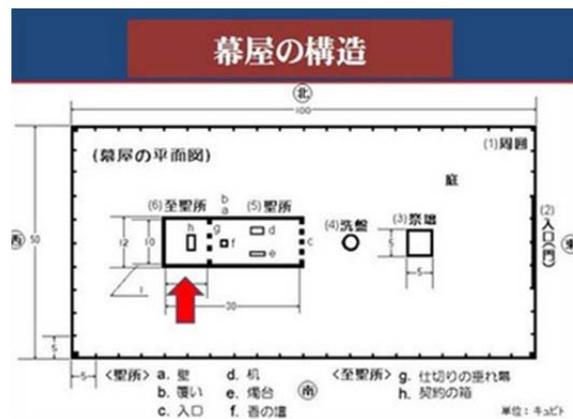
『人々をすわらせなさい。』その場所には草が多かった。そこで男たちはすわった。その数はおよそ五千人であった。』

(ヨハネ 6:10)

●この部分の並行箇所であるマルコの福音書には、人々が百人と五十人の組になって席に着いたとあります。

「イエスは、みなを、それぞれ組にして青草の上<sup>(1)</sup>にすわらせるよう、弟子たちにお命じになった。そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた。」 (マルコ 6:39~40)

●なぜ、百人と五十人なのか。これは2:1の比率で、しかも100×50=5000(人)となります。「すわった」、あるいは「席に着いた」ということばをヘブル語にすると「ヤーシヤヴ」(יָשַׁב)で、「座る、とどまる、住む」を意味します。これが主を中心にして座るとなると、これはモーセの幕屋における神との交わりを想起させます。モーセの幕屋は、神とイスラエルの民が交わるために神が設計された天のコピーです。北と南は100キュビト、東と西は50キュビトです。幕屋における礼拝を通して、人々は神から与えら



れるパンを食べていのちを得、満足するのです。この「五千人の給食」の奇跡が示唆しているのは、**メシア王国における祝福**です。しかも、余ったパン切れを集めると12のかごがいっぱいになったのです。

●「12」という数には特別な意味があります。それは神が切望し、喜びとされる数です。メシア王国(千年王国)

においては、神と人がシオンにおいて神との交わりを楽しみますが、詩篇 132 篇 13 節に「主はシオンを選び、それをご自分の**住みか**として**望まれた**。『これはとこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは**住もう**。わたしがそれを**望んだ**から。』とあります。「住か」は「ヤーシャヴ」の名詞化されたものです。「住もう」も同じく「ヤーシャヴ」です。そして「望まれた」「望んだ」と訳されたヘブル語は「アーヴァー」(אָוַר)です。この「アーヴァー」のゲマトリアが  $1+6+5=12$  なのです。神のこだわりの数である 12 は、神が望まれ、喜びとされる数なのです。まさに、「12 のかご」はメシア王国における神と人との食卓の喜びを表していると言えます。

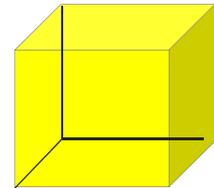
## 2. 四千人の給食が示唆していること

●五千人の給食における「五千」という数は  $100 \times 50$  というこで、あまりにもスッキリしています。しかし、四千人の給食はどうでしょう。「四千」という数をどのように説明することができるでしょうか。それを解明することは、実は「五千」よりも難しいのです。私は四千という数を思い巡らしているうちに、この四千という数字は

**4×1000** だという思いが来ました。直観です。

●**4=至聖所と同様に立方体**、比率は 1:1 です。その辺の数は 12 です。

$12 \times 12000 = 144000$  この数は神によって贖われたすべての者の象徴的な数だと考えられます。つまり、イスラエルの 12 の部族から贖われたすべての者の象徴数でもあり、かつ新しいエルサレムにおける贖われた者の象徴数でもあるということです。



● $1000 = \text{アーレフ} = \aleph$  「アーレフ」は 二つの「ヨッド」(י)と一つのヴァヴ(ו)からなっており、このゲマトリアは  $2 \times 10 + 6 = 26$  です。これは「ヤーウエ」(יהוה)のゲマトリア( $10+5+6+5=26$ )と同数です。つまり、「アーレフ」は「主」ご自身を表わす数字でもあります。

● $4 \times 1000 = 4000$  の 1000 はメシア王国の「千年」という期間であると同時に、

①「**完全**」(Perfect, Full)を意味するヘブル語「トーム」(טוֹם)のゲマトリア、すなわち、 $400 = \text{ターム}$ 、 $600 = \text{ムム}$  (ムム・ソフィート)と解せます。

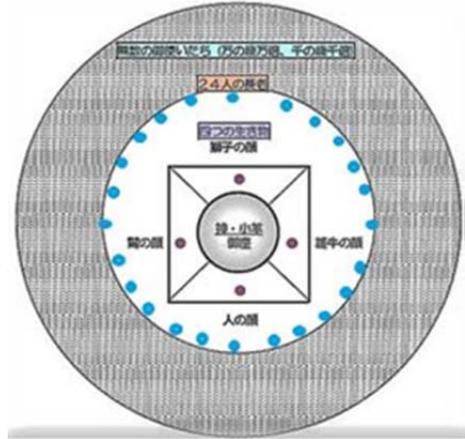
②「**終結**」(End)を意味するヘブル語「ケーツ」(קֵץ)のゲマトリア、すなわち、 $100 = \text{コフ}$ 、 $900 = \text{ツァデー}$  (ツァデー・ソフィート)とも解することができます。

●4000 はエゼキエル書 42 章にあるメシア王国における主の神殿全体を表わしています。これはモーセの幕屋とは異なります。むしろ、**モーセの幕屋を内包した天にある「新しいエルサレム」の模型**と言えます。エゼキエル書 42 章の神殿全体は一辺が 500 キュビトからなる**正方形**です。これは天における御座のコピーということが言えます。ヨハネの見た天の御座には四つの生き物(各



四つの方向にひとつずつと 24 人の長老がいます(黙示録 4 章)。

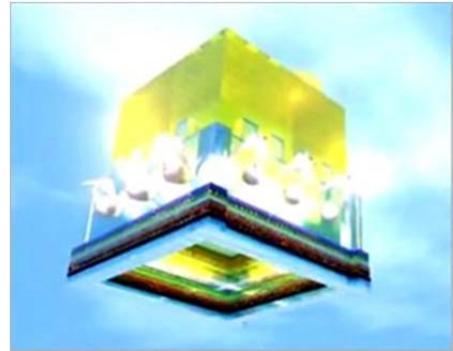
●やがて天から降りてくる**新しいエルサレム**は一辺が 12000 スタディオンからなる立方体。エゼキエルの神殿全体の一辺は 500 さお。この数に 24 を掛けると 12000。24 という数字は、12+12 で、イスラエルの 12 部族と教会の 12 使徒の数の和です。12×12=144 144000 人(144×1000)という数も関係があるように思われます。いずれにしても、144000 は、神に贖われたすべての民の象徴数です。



●数における単位はそれほど関係がないようです。要は数そのものに意味があります。つまり、12000 スタディオンを 2220km に変換しても意味がないということです。

### ベアハリート

●「四千人の給食」に秘められた奥義とは、やがて神のマスタープランにおけるメシア王国での神殿、および新しいエルサレムの立方体を意味し、それは世界の四方から集められた 12 部族のイスラエルの民と 12 使徒を中心とするキリストの花嫁を表わし、神と人(新しい人=ユダヤ人と異邦人)とが共に住む永遠の家を意味していると考えられます。しかも、そこに「7」という数字があるのは、神のご計画が完全に成就することを意味します。神の永遠の安息を意味する完全数なのです。



●なぜ、福音書には、「五千人の給食」の奇跡と「四千人の給食」の奇跡が記されているのか。なぜ、「五千人の給食のしるし」が先で、「四千人の給食のしるし」が後なのか。それは、神のマスタープランにおいて現わされる啓示の順序に基づくものであり、後の方がより究極的啓示だからと言えます。

●「五千人の給食」の奇跡はメシア御国における神の食卓のしるしです。旧約の主の幕屋(2:1 の比率)を意味し、そこから、50×100=5000 という人数の意味を解釈できます。パンの 5 という数は旧約のモーセ五書を意味しているのかも知れません。しかし「四千人の給食」の奇跡は、メシア王国、および神のヴィジョンにおける最終ステージである新しいエルサレムの永遠の神の住まい(1:1 の比率を持つ立方体)を重ねるように形で示唆していると考えられるのです。イエシュアがなされたすべての奇跡とすべての教えは、すべて「御国の福音」に関する事柄であることを常に念頭において解釈されなければならないのです。それぞれの時代が要求する「時代的精神」を取り入れて解釈されてはならないのです。

- 「五千人」の給食のしるし—マタイ 14 章、マルコ 6 章、ルカ 9 章、ヨハネ 6 章・・・ **旧約の神の幕屋**
- 「四千人」の給食のしるし—マタイ 15 章、マルコ 8 章・・・ **新しいエルサレムという永遠の神の幕屋**